法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-22

生活水準の歴史的水準比較ー近世日本とヨーロッパー（薩埵正邦生誕150周年記念連続講演会ー明治日本の産業と社会ー第4回講演録）

SAITO, Osamu / 斎藤, 修

(出版者 / Publisher)
法政大学イノベーション・マネジメント研究センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学イノベーション・マネジメント研究センター ワーキングペーパーシリーズ / 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター ワーキングペーパーシリーズ
(巻 / Volume)
44
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
35
(発行年 / Year)
2007-10-18

Hosei University Repository

斎藤 修

法政大学イノベーション･マネジメント研究センター 編

生活水準の歴史的水準比較

－近世日本とヨーロッパ－

法政大学創立者 薩埵正邦（さったまさくに）生誕 150 周年記念連続講演会
―明治日本の産業と社会―
第 4 回 講演録 2006 年 4 月 7 日(金)

2007/10/18

No. ４４

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター
The Research Institute for Innovation Management, HOSEI UNIVERSITY

Hosei University Repository

WORKING PAPER SERIES

Osamu Saito

Historical Comparisons of Living Standards: Early Modern Japan and Europe

In Commemoration of the Founder of Hosei University,
SATTA Masakuni and his 150th Birth Anniversary

October 18, 2007

No. 44

The Research Institute for Innovation Management, HOSEI UNIVERSITY

Hosei University Repository

法政大学創立者・薩埵正邦生誕 150 周年記念連続講演会―明治日本の産業と社会―
第 4 回

斎藤修（一橋大学経済研究所教授）
「生活水準の歴史的水準比較 ―近世日本とヨーロッパ―」

もくじ

１．　報告者紹介
２．　岩倉使節団のみたヨーロッパと富裕の国際比較
３．　幕末維新の日本の所得水準―通説―
４．　実質賃金と１人当たりの所得
５．　新しい発見と解釈
６．　質疑応答

１．報告者紹介

○司会者（洞口）　　法政大学創立者・薩埵正邦生誕 150周年記念連続講演会―明治日本の産業と社会―第４回「生活水準の歴史的水準比較―近世日本とヨーロッパ」ということで、本日は一橋大学経済研究所教授・斎藤修先生にご講演をお願いいたします。

私どもの法政大学は1880年の創立でございます。そのとき３人の若者によって創立されたわけですが、金丸鉄、伊藤修、そして、この薩埵正邦という３人の人物が中心的な活躍をいたしまして、そのほか３名の人物とともに６名で東京法学社・東京法学校として1880年（明治13年）に創立いたしました。

その当時の日本が一体どのような状態の国であったのかということが本日の報告のテーマになります。薩埵正邦の生誕が1856年ですので、150周年を記念いたしまして連続の講演会を企画したということでございます。

1856年は安政３年になりますが、薩埵正邦は京都の石田梅岩の学問を継ぐ学者の家系に生まれて、そこでいわゆる石門心学を学び、その後日本政府が京都に招いたフラ

Hosei University Repository

ンス人のレオン・デュリーという人物と、その奥様からフランス語を習得します。その仏語学校が京都から東京に移転するのに伴って薩埵も東京にやってきて、その後、内務省の勤務になり、ボアソナードの知己を得て彼の世話をすることになったようです。法政大学の前身・東京法学校が創立されますと、ボアソナード博士は法政大学では無給で教えておられました。

この第４回に続きまして、第５回は上智大学文学部教授の喜田先生に「石田梅岩の研究にみる日本人の心―薩埵正邦の思想環境―」ということで、石門心学、あるいは石田梅岩の学問を教える家庭に育ったならば、どのような倫理観、あるいはどのような生活上の規範を身につけた人物ができ上がるのだろうかということを問うてみようと予定しております。

今回のテーマである「生活水準の歴史的水準比較」とつながる点ですけれども、貧しい学者の家庭に生まれた薩埵先生ですけれども、日本における貧しさの程度という問題を斎藤先生にお話頂きたいと存じます。この連続記念講演会は個人に焦点を置くということではなくて、あくまで時代に焦点を置き、そして、我々のこの大学、今、このように発展していますけれども、このように発展した大学の礎を築いた人物が生きた時代を経済史、社会史、経営史という分野から多角的にお話をいただくという企画でございます。

社会史と経済史、あるいはその応用領域としての経営史にはさまざまな特徴があろうかと思います。社会史というのは、現場の写真であるとか、博物誌のように現物を集めるという作業が中心になりますので、それを突き詰めていくと１つの博物館をつくらなければいけないという話になります。既に第１回、第２回でお話をいただいたように、富岡の製糸場であるとか、たばこと塩の博物館のような「受け皿」が必ず必要になってくるアプローチだろうと思います。

経済史の方はもう少し抽象度が高く、最終的には数値データに落とし込まれますので、多少は退屈なのではないかと思います。経済史では、政治史のように個人が特定化できて、有名人がどのように動いたかという人物もみえません。経済史は、我々一般の大衆がどのように動いたか、その集合的な現象として何がみえるのかという非常に抽象度の高い領域になります。ただし、そうした経済的背景がわかりませんと、博物館に行ってそこに置いてあるものをみてもその文脈がみえないということになろうかと思います。

法政大学は、皆さんご承知のように、中世、近世の研究も非常に盛んです。法政大学には能学研究所もございますけれども、江戸時代がどのような時代だったかについての、いわゆる江戸学についても有名です。江戸学での基本的なメッセージは、江戸時代というのは非常に国際化した時代であり、日本の江戸には、ある種、大航海時代以来のグローバル化した文物がやってきていたのだということが発見されているわけです。

Hosei University Repository

そうしますと、江戸というのは国際化された都市であり、江戸時代は豊かだったのだろうかという素朴な疑問がわいてまいります。今の日本の東京のように、豊かでグローバル化した都市だったのか、あるいは豊かでありながらも実は貧しい都市だったのかという疑問がわいてまいります。そういうバックグラウンドについて理解しますと、江戸から明治への流れというものも理解が変わってくるのだろうと思います。

きょうは、その謎、つまり、明治時代の東京というのは果たして豊かな町だったのか、それとも貧しい町だったのかという点について斎藤先生にお話を伺いたいと存じます。明治時代は、国際化していてお雇い外国人がやってきた都市だろうと思いますが、東京は果たして豊かな都市だったのでしょうか。

斎藤先生のご経歴等については、皆さん、既にご承知のとおりだろうと思います。プロト工業化論についての先駆的な業績を発表され、日本の経済史について一橋大学の長期経済統計の伝統をくみながら、常に刺激的な研究をされておられる先生です。

それでは、斎藤先生、ぜひよろしくお願いいたします。

２．岩倉使節団のみたヨーロッパと富裕の国際比較

○斎藤　　このような記念すべき講演会にお招きいただき、非常に名誉に思っております。

今、洞口先生がご説明になりましたように、この連続講演会というのは、薩埵正邦という人が活躍をした時代の経済、産業、社会について話されるのだと思いますが、私は――13回のうち１回ぐらいはいいかと思いまして――薩埵正邦が生まれた時代の話をしたいと思います。それも余り細かな話はできませんので、ざっくりとした、大づかみに徳川時代の日本というのは大体このくらいというような話をしてみたいと思っております。

タイトルは「生活水準の歴史的水準比較」という、ちょっとこなれない言葉ですけれども、要するに、生活水準の比較をしたいということです。それも、今申しましたように近代より前の、近世と呼ばれる時代の日本とヨーロッパを比較してみたい。

水準比較というとき、この水準とは何かといいますと、生活水準が比較対照の一方の国では上がっているけれども、こちらでは停滞しているというような比較ではなくて、絶対的な基準を決めて、本当はどちらが高かったかをはっきりさせたいということがこのタイトルには含まれております。

最初に、今いったようなテーマに関して我々がどういうイメージをもっているかということを幾つかみてみたいと思います。

Hosei University Repository

第１表　アダム・スミス以来の認識

「中国とヨーロッパでの生活資料の価格差はきわめて大きい。中国の米はヨーロッパのどこの小麦よりもはるかに安い。」
「中国とヨーロッパの労働の貨幣価格の差は、生活資料の貨幣価格の差よりもさらに大きい。中国は停滞しているようにみえるのに、ヨーロッパの大部分は改良されつつある状態であるため、労働の実質的補償はヨーロッパのほうが中国より高いからである。」
（『国富論』1789年）

第１番目はこれでありまして、要するに、経済学をつくった人といっていいでしょうか、アダム・スミスの『国富論』です。この本にはこういう一節がありました。ここでは「中国」と書いてあるところを「日本」と読みかえていただいても、話は合うと思いますけれども、「中国とヨーロッパでの生活資料の価格差は極めて大きい。中国の米はヨーロッパのどこの小麦よりもはるかに安い」。

この場合、生活資料というのは、生活をしてゆくために食べるものが主となりますね。アダム・スミスも食糧を考えておりますので、ここではアジアの米とヨーロッパの小麦を比較しているわけですが、「その米は小麦よりもはるかに安い。だけど、中国とヨーロッパの労働の貨幣価格の差は、生活資料の貨幣価格の差よりもさらに大きい」。

労働の貨幣価格とは何かというと、当時の貨幣による賃金収入です。これはその差よりもさらに大きい。結果としてどちらが大きいのかというと、「中国は停滞しているようにみえるのに、ヨーロッパの大部分は改良されつつある状態であるため、つまり、片方は停滞しているけれども、片方は発展しているので、労働の実質的補償はヨーロッパの方が中国より高いからである」。

実質的補償というのは、今の経済学でいうと実質賃金ということになります。これは、もらった賃金を物価でデフレートしたものです。物価水準を考慮して計算し直した値でいうと、米、つまり、生活資料の価格ははるかにヨーロッパの方が高いけれども、もらう賃金はもっと高いので、その収入額の実質的な価値という点でいってもヨーロッパの方が東アジアよりも高い、そのようにいっているわけです。

これはアダム・スミスだけの考えではありません。ほぼ同じような考えが当時の――当時のというのは、アダム・スミスがこれを書いたときは18世紀の末ですので、まだ産業革命を知らない時代です――多くのヨーロッパの知識人に共有されていた考え方だと思います。

つまり、中国というのは偉大な文明の国であるが、今は停滞している。他方、ヨーロッパは発展している。だから、我々の方が生活は豊かになっている、という観念ですね。そういう観念は18世紀の学者の間で一般的になっていたのです。その後、19世

Hosei University Repository

紀になり、20世紀になり、それはほぼ定説としていろいろな人の本の中に、それが経済の本であれ、歴史の本であれ、あるいは社会学の本であれ受け継がれている考え方であるといってよいと思います。つまり、ヨーロッパは産業革命を経験したから急に豊かになったのでは必ずしもなくて、それ以前から世界の中で豊かなところであった、こういう考え方です。

第２表　岩倉使節団の観察

「当今欧羅巴各国、ミナ文明ヲ輝カシ、富強ヲ極メ、貿易盛ニ、工芸秀テ、人民快美ノ生理ニ、悦楽ヲ極ム、其情況ヲ目撃スレハ、是欧洲商利ヲ重ンスル風俗ノ、此ヲ漸致セル所ニテ、原来此洲ノ固有ノ如クニ思ハルレトモ、其実ハ然ラス、欧洲今日ノ富庶ヲミルハ、一千八百年以後ノコトニテ、著シク此景象ヲ生セシハ、僅ニ四十年ニスキサルナリ」

（久米邦武『米欧回覧実記』）

それでは、別な人はどう考えたかということで、ちょうどまさに薩埵正邦の時代ですが、日本人がヨーロッパをどうみたかというのをみてみましょう。

第２表は岩倉使節団の人たちがみたヨーロッパです。岩倉使節団は、ご承知のように、明治初年に岩倉具視が団長となり、ほぼ２年にわたってアメリカとヨーロッパ諸国をぐるっと回った外交使節兼視察旅行団だったわけですが、そのときに久米邦武という人が正式な記録係として参加していて、彼が帰ってきてから膨大な報告書を書きました。それが今では岩波文庫に入って、5冊になる相当大部のものですが、非常におもしろい。挿絵もついています。皆さん、もしヨーロッパへ旅行することがあったら、１冊もっていって、その挿絵どおりかどうかみてくるのも楽しいと思います。しかし、おもしろいのはそういう名所旧跡の話ではなく、政治や産業のことから、今の言葉でいえばマクロ経済の状態まで、それぞれの国についてみて調べたことが記されていて、それが非常に興味深いのです。

今、ここに引用しましたのは、英国編のなかの言葉ですけれども、これは必ずしも英国だけではなくて、ヨーロッパ全体についてのまとめとなっています。「当今欧羅巴各国、ミナ文明ヲ輝カシ、富強ヲ極メ、貿易盛ニ、工芸秀テ、人民快美ノ生理ニ、悦楽ヲ極ム、其情況ヲ目撃スレハ、是欧洲商利ヲ重ンスル風俗ノ、此ヲ漸致セル所ニテ、原来此洲ノ――ヨーロッパですね――固有の如クニ思ハルレトモ、其実ハ然ラス、欧洲今日ノ富庶ヲミルハ、一千八百年以後ノコトニテ、著シク此景象ヲ生セシハ、僅ニ四十年ニスキサルナリ」。

これなかなか複雑なことが書いてある文章です。イギリスに滞在したのは1872年（明治５年）、明治維新が終わってまだほんのわずかのときです。使節団の侍はまだ

Hosei University Repository

「ちょんまげ」を結っていました。そういう人がヨーロッパをみると、すごいと思うわけです。町の市庁舎をみても宮殿をみても、また工場をみても。まさに「文明ヲ輝カシ、富強ヲ極メ」と写るわけです。実際、イギリスでは非常にたくさんの工場を見に行っています。大きな煙突があって煙が出ている。工場自体もほとんどはレンガか石造りですから、そういうのをみて驚くわけです。それだけではない。そういう経済力が基礎にあってはじめて、あの豪華な宮殿とか市庁舎の建物、病院というものがあるのだということを理解したのです。

そこから先はさらにおもしろいのですが、これはヨーロッパが昔からそうだったからではないのだと書いています。ヨーロッパ人に、よく聞いてみると、豊かになったのは1800年以降だ。1800年というのはまさに産業革命の日付です。イギリスの産業革命は、1780年という人もいれば1760年からという人もいれば、人によっていろいろですが、18世紀の末から始まったわけです。ですから、ヨーロッパが豊かになったのは、まさに産業革命以来だというのです。しかもその傾向が顕著になったのは40年前から――つまり1830年代、イギリスでは鉄道ブームのころです。ヨーロッパが「文明ヲ輝カシ、富強ヲ極メ」るようになったのは、それ以後だったというのですね。ここには、確かに現在では差があるけれども、我々は追いつける。何とか追いつきたいという願望が込められているのです。

人によっては、これを50年という人もいました。岩倉使節団の副使であった大久保利通にも、また福沢諭吉にも同じような文章があります。みな、追いつくと思っている。あるいは追いつきたいと思っている。そのような決意がこの文章中にはみられるのですが、事実としては、その時点でのどうしようもない格差は認めざるをえなかったのです。

３．幕末維新の日本の所得水準―通説―

次に、研究者は日本の所得水準についてどう考えているのか、２つほどみてみます。

第３表　アメリカの日本史家

「19 世紀の西洋の水準からすれば、日本の生活は、裕福な者でさえいくらか禁欲的に思える。」
「しかし、1850 年の時点で住む場所を選ばなくてはならないなら、私が裕福であるならイギリスに、労働者階級であれば日本に住みたいと思う。」

（スーザン・ハンレー『江戸時代の遺産―庶民の生活文化』指昭博訳、中央公論社、1990 年）

Hosei University Repository

最初はアメリカの日本史家、スーザン・ハンレーという方の文章です。しばらく前ですが、『江戸時代の遺産―庶民の生活文化』という本を日本から――翻訳ですけれども――出されました。そこではいろいろな角度から生活水準を検討しているのですけれども、結論はこうです。「19世紀の西洋の水準からすれば、日本の生活は、裕福な者でさえ幾らか禁欲的に思える」（第３表）。

これは、先ほどの久米邦武の観察の最初の方に対応します。久米がいうように、建物も室内も、生活のすべてが非常に豊かにみえるわけです。それに比べると、日本では裕福なものですら質素にみえる、このようにいっているわけです。しかし――と、著者は続けます――「住む場所をもし自分が選ぶとすると、私が裕福であるならイギリスに住みたいと思うけれども、もし労働者階級であれば日本に住みたいと思う」。

これもなかなかおもしろい話でありまして、ここで暗にいわれていることは、イギリスは貧富の格差が激しく、日本は格差が小さかった。だから、上層の人はとても豊かで、日本の豊かな人よりもはるかに裕福だけれども、労働者階級だったら自分はイギリスに住みたいとは思わないといっているわけです。つまり、日本の方がいいということをいっているのですね。

もともとハンレーさんの本は、これからお話しするような厳密に測られた生活水準の話というよりは、少し幅広い角度から生活をみております。例えばごみの処理の仕方、あるいは病気の話、そういうちょっと周辺の事柄がたくさん書いてあります。そういうことを勘案して、自分がもし労働者だったらばイギリスよりも日本の方がいい、そういっているわけです。これはこれとしてなかなかおもしろい評価です。

第４表　日本の近世経済史家

江戸システム
「そこに出現したのは、貧窮した農民社会という従来の史観では
とらえられない、意外に豊かな社会の姿である。」
「現代社会や当時の西欧社会に比べると、むしろ進んでいるとさえ
いえるゴミ処理や資源リサイクルの体系が存在した。」
（鬼頭宏『文明としての江戸システム』日本の歴史19、講談社、2002年）

次にもっと最近のものとして、鬼頭宏さんが書いた『文明としての江戸システム』という本からとってみました（第４表）。

彼は江戸時代を１つの文明として、中国文化とは違う、別個のシステムを備えた独自の文明としてとらえるのですけれども、その江戸システムのもとで我々の生活はどうなったか。「そこに出現したのは、貧窮した農民社会という従来の史観ではとらえられない、意外に豊かな社会の姿である」。

Hosei University Repository

第５表　生活水準の尺度

■アダム・スミス：実質賃金
■最近の尺度：一人当り国民総生産（ＧＤＰ）
■生活の質：より広い概念とその尺度
　・死亡率、平均寿命、公衆衛生
　・資源リサイクル
　・体位
■研究の２つの流れ
　・賃金、所得、生産のより厳密な比較
　・生活の質の比較研究

鬼頭さんの評価は、経済的には豊かではなかったかもしれないが、現代社会や当時の西欧社会に比べると進んでいるとさえいえるような、ごみ処理や資源リサイクルの存在まで考慮に入れると、「意外に豊か」だったのではないかというのです。ハンレーさんと違ってリサイクルの話まで入ってきていますが、基本的には似たスタンスです。そういう、通常の生活水準を構成する賃金とか所得とか消費とかいう項目とは異なったところまで拡げて徳川日本の位置を評価しようとしているわけであります。こういう最近の研究をみますと、生活水準を比較するのは結構難しい話なのだなというのがおわかりいただけると思います。

そこで、改めて生活水準の尺度は一体どんなものがあるのだろうか、どういう尺度で考えたら国際比較ができるのかということをみてみたいと思います（第５表）。

アダム・スミスは、先ほどの引用からわかるように、労働者が働いて得た報酬のことだけを考えていました。どのくらい稼げるか、どのくらい給料をもらえるかという話です。例えば皆さんの給料とニューヨークの人の給料とロンドンの人の給料と比べたときに、実質的な手取りは誰が一番多いか、そういう話です。

このとき、アメリカではドルでもらって、イギリスではポンドでもらい、日本では円でもらう。どうして比べたらよいかという問題がすぐ生じます。経済学はこういうめんどうな問題を考えるのが得意です。

皆さんは、為替相場をみて換算すればいいじゃないかと思うでしょう。今、ドルは幾らぐらいですか。117円かそのぐらいですね。そうすると、皆さんの給料を 1ドル＝117円で換算すればいい。ポンドだったらポンド相場で換算すればいい、ユーロだったらユーロ相場で換算すればいいわけです。ですが、その結果は多分、皆さんの実感とかけ離れるはずです。

理由は、為替相場というのは、それぞれの国の物価水準をそのまま反映していない。為替相場というのは貿易の決済に必要な貨幣への需要で大体決まってしまいます。日

Hosei University Repository

本がアメリカに対して輸出超過になれば、ドルへの需要は弱くなり、円高となる。つまり、貿易される財の価格の差が反映するのです。ところが、給料で買うものは、そういう貿易をする財だけではない。例えば皆さんが床屋に行くときの床屋の費用。床屋の料金が高いか安いかというのは為替には全然反映しません。床屋は貿易しませんから。そういう類のものがたくさんあるわけです。それらまで入れてやらないと実質所得――アダム・スミスの言葉でいえば実質的補償――は測れないということになります。そして、最近ではそれを購買力平価(Purchasing Power Parityの頭文字をとってPPPと略されることが多い)というもので換算することができるようになっています。それができれば、確かに賃金、あるいは給料は１つの生活水準の尺度になります。また最近の尺度は人口１人当たりの国民総生産（ＧＤＰ）です。国民総生産は国民総所得と等しくなりますし、国民総支出とも同じになりますので、結局１人当たりのＧＤＰが高いと、うちは豊かだというようにみんな思う。これが今の尺度ですから、現代の開発途上国にではうちが何番目というのはみんな知っています。うちは50番目だったのが42番目になった。そうなれば、その国の大統領なり首相はそれを国民の前で大いに宣伝するに違いありません。このように、購買力平価で換算された値であれば、それが自分の国の豊かさをはかる基準になっているわけです。ただし、その購買力平価を幕末維新、あるいはそれ以前の時代について計算するのは不可能に近い。

経済学を離れますと、別な問題が生じます。それは生活の質の問題です。先ほどの引用文ですと、ハンレーさんとか鬼頭さんはそういうところをみていました。つまり、幾ら生産や所得といった数字上で豊かであっても子供の死亡率が高かったら困るじゃないか、平均寿命が短かかったらどうなんだ、あるいは公衆衛生がひどい、下水の処理がなっていないという状況だったら困るだろう、そういう話です。リサイクルもそうです。アメリカに行きますと、ガソリンの大量消費が顕著です。そういうのに対してちゃんとリサイクルをしている、これは生活の質がいいということではないだろうかとか、そういう話です。ハンレー、鬼頭のお２人が書いていなかったことで、最近議論されている指標としては体格があります。体格というのも立派な生活水準の指標で、こういう見方も最近では出てきているわけです。

こうして大きく分けますと、研究には２つの流れがある。賃金とか所得、あるいは生産、そういうものをより厳密に比較するという方向に行くのが１つ。もう１つは、生活の質を考慮に入れて研究しようというもの。両者はお互いに相補うもので、決して対立した学説ということでは全然ありません。後者はたいへんにおもしろい研究領域ですが、今日は前者の線で話をさせていただきます。

４．実質賃金と１人当たりの所得

以上のことを念頭に置いて、では歴史学の世界ではどういうことが今いわれているか、ということに目を転じたいと思います。今注目を浴びている研究者を１人だけ挙

Hosei University Repository

げると、ケン・ポメランツかと思います。この人が2000年に*The Grate Divergence*という本を書きました。訳せば「大分岐」ということになります。これは、最初に引用しましたアダム・スミス以来の考え方にアジア史の立場にたって真っ向から挑戦した本です。

第６表　ケン・ポメランツと「大分岐」論争

K. Pomeranz, *The Great Divergence* (2000)
- ■東アジアの中核地域（中国江南、日本畿内など）
  - 18世紀までは経済発展、生活水準とも同程度
- ■さまざまな断片的指標による
  - 一人当り消費・カロリー、耐久消費財
  - 賃金・所得データは弱い
- ■東西の「大分岐」が起こったのは19世紀以降

アダム・スミス以来の通念は、17世紀、18世紀の段階からヨーロッパは生活水準が高かった。ルネッサンス以後のヨーロッパは世界の中で一歩先んじていた、その延長に近代がくるという考え方でした。

それに対して彼がいったのは、よく調べてみると、そんなことはない。調べたところはどこかといいますと、彼は中国史家なものですから、中国および日本です。18世紀までの東アジアでは、よく調べてみると経済発展の程度も結構高いし、生活水準もヨーロッパと変わらなかった。今みたいに大きく差がついたのは、結局、19世紀になってからだというのが彼の主張です。

彼が何を調べたかといいますと、やや断片的ではありますが、主要な財の１人当たりの消費とか食糧消費カロリー量、それから、どのくらい耐久消費財をもっているかということなどです。これらについて、わかるかぎり証拠を集めてみたという本なのです。ただ、残念ながら、賃金とか所得とかは意外と弱い。とはいえ、これは非常に大きな反響を呼びまして、今ではこれに関する論争が経済史の世界では起こっているという状況にあります。

第７表　西欧についてわかっていること

- ■実質賃金
- ■一人当りＧＤＰ
- ■西欧内の違い
  - ・北西（イングランドと低地諸邦）
  - ・南（イタリア、スペインなど）

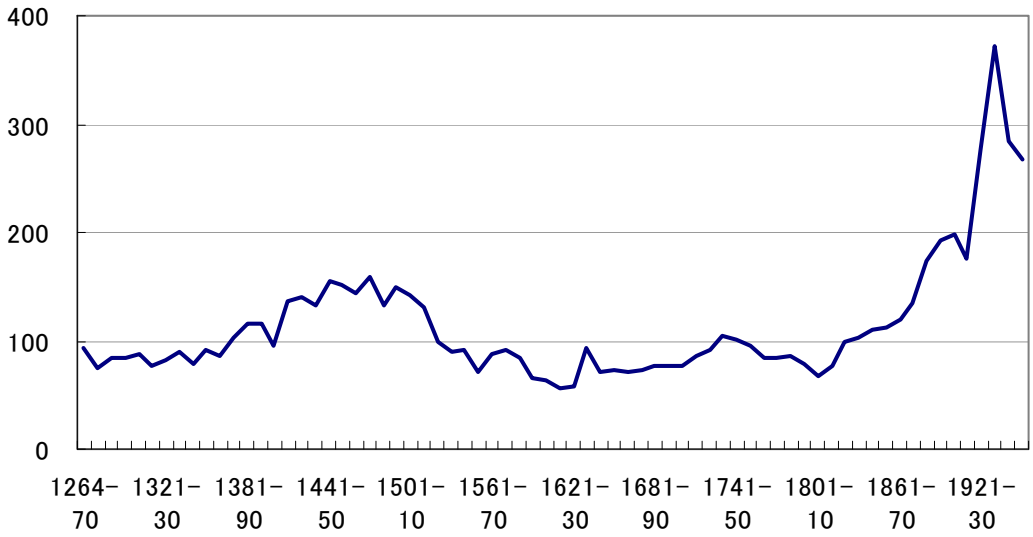
Hosei University Repository

次に、ポメランツの本では弱かった賃金に関して、西欧については一体何がわかっているのか、簡単にみておきます。

近世の西欧について実質賃金がどう変化してきたかということはかなりよくわかっています。近世どころか中世から、非常に長い足取りがわかるのです。それから、１人当たりのＧＤＰについても推計がえられます。その精度はよくないと考えた方がいいとは思いますが、同じ時代のほかの地域のＧＤＰに比べますと、多分ずっとましであろうと思います。

それから、これからみるのは欧州でも西洋でもなく、西欧だということが大事です。つまり東欧は別、アメリカも対象外です。さらに西欧といいましても、具体的にどの国や地域を見ているかは問題です。わかってきたことは、西欧といっても南欧のイタリアとかスペイン――そこへフランスも入れてもいいと思いますが――と、北のイングランドや低地諸邦（オランダ・ベルギーのあたり）とは相当に違うということです。

第１図　イングランドの実質賃金，１２６４～１９５４年



（出所）次の論文より作成：H. Phelps Brown and S.V. Hopkins, “Seven Centuries of the Prices of Consumables, Compared with Builders’ Wages”, *Economica*, Vol.23 (1956), pp. 296-314.

これらを念頭においてグラフをみていただきます。最初におみせするのは古典的な研究でありまして、戦後すぐ、1950年代に行われた推計作業です。南イングランドにおける1264年からの建築職人の実質賃金です。1264年というのはすごく前の時代ですね。皆さん、中世ヨーロッパで黒死病があったということはご存知だと思いますが、

Hosei University Repository

黒死病が起こるよりも前です。

どうしてこのようなデータがあったのかといいますと、オクスフォードとかケンジブリッジに行きますと、コレッジというのがあります。もっとも古いコレッジはまさにこの時代からあるのです。そういうところの帳簿類をひっくり返すと、雇った職人などの賃金を記帳した記録がある。そういう賃金データをつないでゆくのです。十分に連続性がある賃金記録がとれるのは建築関係、つまり大工や石工だったのでしょう。そういうデータをつないでゆき、次に生活資料に当たる消費バスケット（パンをどのくらい、牛乳をどのくらい、等々）の価格を計算し、賃金指数をその価格指数で割ると実質賃金の指数系列がえられます。

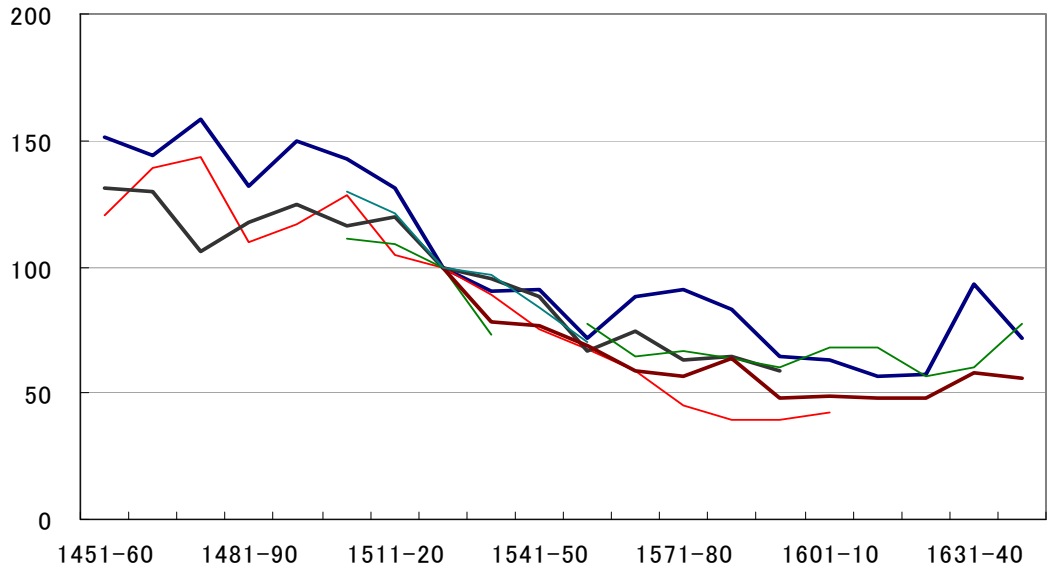
その実質賃金がこれです。次におみせする図との関係で基準年を1521年から30年にとり その平均を100としてグラフをかくと、このようになります。オリジナルとは少し違って、10年平均をとった値をグラフにしています。

ここからいろいろなことがわかります。驚くべきことは、中世には相当な賃金上昇があったんですね。最初のところは100を少し下回る水準ですが、これが 160-170になったのですから、2倍近い上昇です。これは黒死病の効果です。黒死病によって西欧の人口は３分の１が減少したといわれます。それは人手不足を意味しました。その結果として、こんなに賃金が上がったのです。

次に、ルネッサンス以降の時代には逆にすごい勢いで下がり始めました。近世の一時期にちょっとだけ戻しますが、また低下傾向に転じ、19世紀初頭まで続きました。ですから、大づかみにいうと、中世から産業革命のころまでは、賃金率が低下しっぱなしだったことになります。これは絶対水準を時間軸で縦にみているのですが、中世終わりの水準を回復するのは一体いつかというと、19世紀の後半でした。6世紀後になってようやく元の水準に戻った。これは驚くべきことですね。

Hosei University Repository

第２図　西欧諸地域の実質賃金，１４５１～１６５０年



（出所）第１図の元データおよび以下の論文をもとに作成：H. Phelps Brown and S.V. Hopkins, “Wage-rates and Prices: Evidence for Population Pressure in the Sixteenth Century”, *Economica*, Vol.24 (1957), pp. 289-305, and “Builders’ Wage Rates, Prices and Population: Some Further Evidence”, *Economica*, Vol. 28 (1959), pp. 18-38.

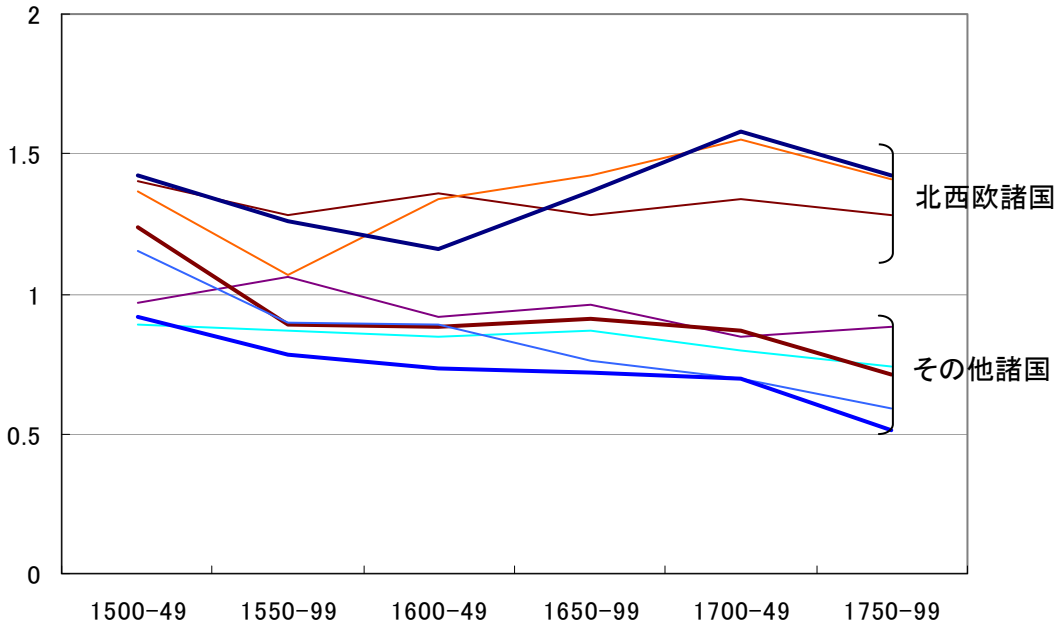
別な研究をみましょう。といっても同じ研究者の仕事ですけれども。近世の南イングランドがそれほどひどい生活水準悪化に悩まされていたのだったら、時期は短いけれども、15世紀から17世紀までヨーロッパ各地について同じことをやってみたらどうなるか、検討したいというのが目的の研究でした。ウィーン、ドイツのアウグスブルグやミュンスター、アルザス、ヴァレンシア、これらに南イングランドを加えたのがこのグラフです。やはり1521-30年を基準として、原図をみやすいように描きなおしてあります。

これをみると一目瞭然、どこも同じように下がっています。ですから、このときのヨーロッパは３世紀余の間、賃金によって測った生活水準はずっと下がりっぱなしだったのです。決してイギリスだけの話ではない。イギリスのコレッジや修道院だけの特殊現象ではない。西欧全域にわたる現象だったというのが、ここからの発見でした。

これはびっくりするような発見ではありましたが、問題点もあります。測り方に問題があるのです。これは、どの地域でも1520年代を100と固定して描いたグラフでしたそのために、針金を一箇所でたばねて結んだような絵となっています。

Hosei University Repository

第３図　西欧諸都市のウエルフェア・レシオ，１５００～１７９９年



（出所）次の論文より作成：R.C. Allen, “The Great Divergence in European Wages and Prices from the Middle Ages to the First World War”, *Explorations in Economic History*, Vol.38 (2001), pp. 411-447.

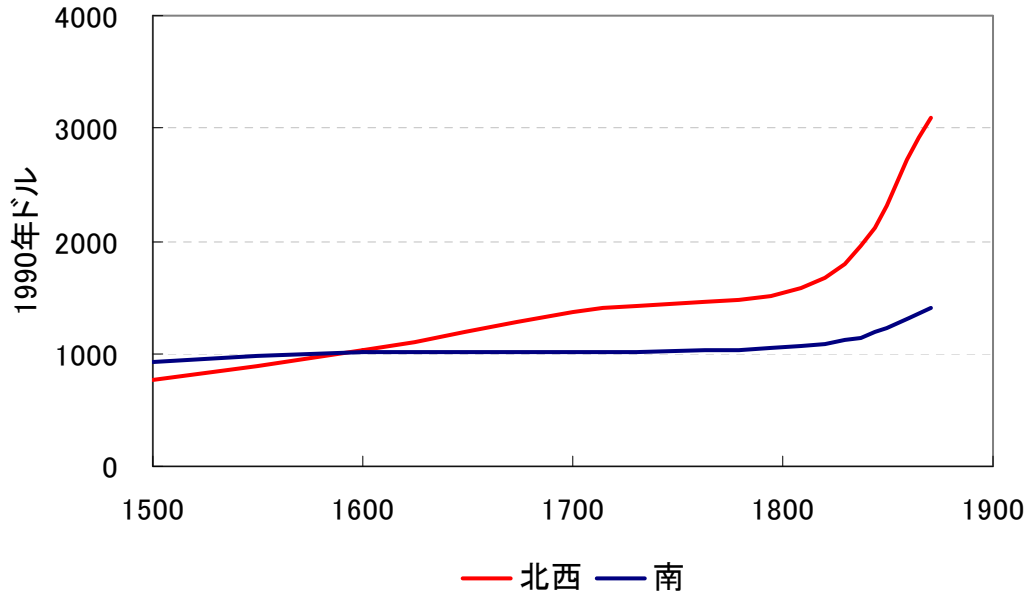
それはこの次のグラフ、最近の研究成果と比較すると違いがわかります。前のグラフは基準年である1520年代において、各地域の賃金水準に差があるかないかを問わないで、そこを100にして指数を計算していました。新しいほうのグラフでは――ほぼ同じところを対象としています。アントワープとかクラカウ、それからイタリアが新たに入りましたが――個々のグラフが少し違うやり方で描かれています。全体としては同じような傾向で、やはり中世以降は下がっていた。ただし、前と違うのは、基準年のレベルが同じところに固定されていないことです。イングランドとフランスで比較年次に水準の差があれば、それがそのまま反映するように描かれているのです。

そうすることによってわかったのは、西欧のなかにも上の２つ（北西欧諸国）と下の４つ（その他諸国）との間に明瞭な水準の違いがあったらしいということです。前者はロンドンとアントワープ、後者はクラカウ、ウィーン、ヴァレンシア、北イタリアです。確かに、（この図にはありませんが）中世盛期と比べるとどこでも1800年ころまでの実質賃金は下がっていたのですが、上のグループはそれほどひどい低下ではなく、それどころか18世紀前半にはかなりの水準にまで戻すことができました。これと対照的に、下のグループでは明白に下がっていました。中世、14世紀から15世紀の中葉までは、賃金水準の一番高いところはイタリアやウィーンでした。一般的にいって、南のほうが北よりも豊かだったのです。ところが15世紀以降になると、北のイングラ

Hosei University Repository

ンドやベルギー・オランダ地域が南欧・中欧よりも上にきて、時間とともにその間のギャップが拡大したということを、このグラフは示しています。

第４図　西欧の経済成長（一人当りＧＤＰ）



（出所）次の論文より作成：A. Maddison, *The World Economy: A Millennial Perspective* (Paris, 2001)；金森久雄監訳『経済統計で見る世界経済2000年史』（柏書房，2004年）.

以上、賃金の比較をしました。そこで次に、１人当たりのＧＤＰでみてみたいと思います。この分野はアンガス・マディソンという先生の独断場です。世界のＧＤＰを国ごとに、近世まで遡って（最近では紀元１年まで)、しかも現在の貨幣価値で、具体的には1990年のドルで推計しているのです。そんなことができるのかとお考えになると思いますが、ヨーロッパやその他の古い文明のあるところは何がしかの資料がありますので、他よりはましな推計になっているとはいえます。

ここではそれをヨーロッパ南欧に分けて比較します。北西部というのは、イギリスと低地諸邦、現在の地名でいうと、ベルギーとオランダを合わせたところです。南欧はスペインとポルトガルとイタリアを合わせた地域です。

そうしますと、やはり南北で全く違うパターンとなります。南は１人当たりのＧＤＰがほとんど横ばいですね。それに対して北はちゃんと上がっている。1500年で（現在のドルで評価して）800ドル弱だったのが、1800年ころとなりますと 1,500ドルぐらい、こういう感じです。この成長は現代の感覚でいうと、ごくわずかです。3世紀かかってようやく倍になった。でも、南とは異なって生活水準の上昇があったのです。もちろん、その正確さに関しては文句をいう人がたくさんいますが、南北で対照的な傾

Hosei University Repository

向を示していたということは正しいのではないかと私は思います。

歴史家というのはいろいろなことを調べていまして、例えば遺産目録というものをみて、テーブルや椅子を幾つもっていたか、テーブルクロスを何枚もっていたかとか、ナイフやフォークをどのくらい揃えていたかとか、そういうデータをこつこつ集めて、それが17世紀から18世紀にかけてどう変化したかを研究している人がいます。その成果をみますと、イングランドとオランダなどでは、マディソンさんの一人当たりＧＤＰ推計と似たような傾向だったことがわかるからです。

第８表　問題

■一人当りＧＤＰと実質賃金は異なった尺度ではないのか？
■西欧では、一人当りＧＤＰは増えているのに、実質賃金は低下し続けた。これは本当か？
■異なった文化圏のあいだで、実質賃金を比較するにはどうしたらよいか？
■以下、 J.-P. バッシーノ，馬徳斌，斎藤修「実質賃金の歴史的水準比較：中国・日本・南欧，1700-1920年」『経済研究』第56巻4号（2005年）による。

そうなりますと、しかし、難しい問題が生じます。生活水準といっても、１人当たりのＧＤＰで測った場合と実質賃金で図った場合とでは違った結果となるのはどうしたことなのだろうか、という問題です。北西ヨーロッパにおいては、１人当たりＧＤＰは上昇していましたけれども、実質賃金は下がっていました。どういうことなのだろうか。南欧に行きますと、一つの尺度では停滞していてもう一つの尺度では非常に下がっている。どちらの尺度が正しいのだろうか、それともどちらの尺度も正しいのだろうか、こういう問題です。

答えは、どちらの尺度も現実の変化の一面を反映しているということだと思います。２つの尺度にギャップがみられたとしたら、そのこと自体が現実の社会で起こっていることの反映だということです。具体的には、その社会での所得格差が開いている証拠だということです。つまり、実質賃金というのは――データがとりやすいということがありますが――大工さんとか都市の日雇労働者とか、そういう中よりは下層の職種の賃金をとることが多い。それに対して、１人当たりのＧＤＰはすべての国民の平均をとりますので、ちょうど社会の真ん中あたりの階層の人の所得をみていることになります。したがって、労働者層の賃金収入と中間層の所得とが乖離をしていたら、それはその間の所得格差が開いている、拡大しているということを意味しているのです。

Hosei University Repository

第９表　異文化間賃金水準の比較

■現在なら購買力平価換算
■異なったバスケット
　　品目構成は異なるが、
　　総栄養摂取1940キロカロリー前後、
　　蛋白質摂取80グラムの基準でコントロール
■賃金所得：
　　想定年間労働日数250日、3人家族
■Welfare ratio

そこで、次の問題に移ります。異なった文化圏の間で実質賃金を比較するにはどうしたらよいだろうか、という問題です。これまでみてきた賃金のグラフはすべてヨーロッパについてでした。先ほど、実質化をするためには消費バスケットをつくるという話をしました。それ自体容易ではないのですが、それでもヨーロッパ人の消費バスケットはそんなに違わないですね。小麦製品と肉類、乳製品、これらが基本です。南に行くとオリーブ・オイルが入ってきたり、逆に北へ行くと肉類の比重が高くなったりとか、そういう差はありますが、ヨーロッパの食生活は基本的には同じでした。それに対して、そのヨーロッパ地域とアジアの間の比較をするにはどうしたらよいのだろうかというのが、これからの話となります。

５．新しい発見と解釈

ここからは、この問題について最近、私が友人のフランス人と中国人と一緒にやった共同研究のさわりを紹介させていただきます。

問題の根底には、食文化、消費文化の異なった地域間の賃金水準を比較するにはどうしたらよいかということがあります。一般的に歴史家の間でやられていたのは、銀の含有量に直してしまうというやり方でした。銀が当時一番よく使われた共通貨幣みたいなものだったので、一種の外国為替相場換算をするに等しい方法です。ただ、これでは困ることがあります。日本の徳川時代みたいに全く鎖国をしているときにはその方法は使えない。銀の国内価格と国際価格が離れてしまっていたからです。現在なら先ほど述べましたように購買力平価（ＰＰＰ）換算をすればよいのだけれども、それには十分なデータがない。先ほどみた1500年からの１人当たりＧＤＰの場合は1990年のＰＰＰ換算を適用していますが、どうみても強引だし、細かな比較をしようとすると不正確になるという批判があります。

このように難しい課題なのですが、ごく最近提案された方法があります。ボブ・アレンという方の方法です。それは、消費バスケットをつくるのですが、それを消費金額でやらないでカロリーと必要たんぱく質摂取量とでやってしまおうという方法です。

Hosei University Repository

どのようにするかというと、どの国のバスケットも総栄養摂取量を1,900キロカロリー程度にそろえ、たんぱく質は80グラムとし、そのうえで、それぞれの食文化に合ったバスケットをつくるのです。そして、それらの価格が幾らかを調べる。こうやってつくられた個々の消費バスケットをもってそれぞれの貨幣賃金を評価する、こういう方法です。

この方法のよいところは、物の値段を直接比較しないで済むこと、その国の主食を使って異なった食文化の国と比較が可能となることです。あとは１年当たりの労働日数を250日と設定して年間賃金収入額を計算し、一方で家族人数を大人換算で3人と仮定して家族が生活してゆくのに必要なバスケットを求めます。そして、前者を後者で割りますと比が求められます。これも一種の実質賃金値ですが、アレンさんはこの比をウェルフェア・レシオと呼びました。もしこの値が１ならば家族みんなが何とか暮らせる、１を下回っていると困窮状態、１を上回っていれば余裕があるということを示しています。

第１０表　消費バスケットの構成比較

品目	日本		ヨーロッパ	インド
	A	B	(Allen 2005)	(Allen 2005)
パン（kg）	－	－	208	－
豆類（除大豆，リットル）	4	4	52	52
肉類（kg）	－	－	26	26
バターまたはギー（kg）	－	－	10.4	10.4
大豆（kg）	52	26	－	－
米（kg）	114	30	－	143
大小麦（kg）	10	70	－	－
魚類（kg）	3.5	－	－	－
雑穀（kg）	16	75	－	－
食用油（リットル）	1	1	－	－
リネン類（m）	5	5	5	5
灯油（リットル）	2.6	2.6	2.6	2.6

（出所）次の論文より引用：J.-P. Bassino，馬徳斌，斎藤修「実質賃金の歴史的水準比較」『経済研究』第56巻4号（2005年），348-369頁.

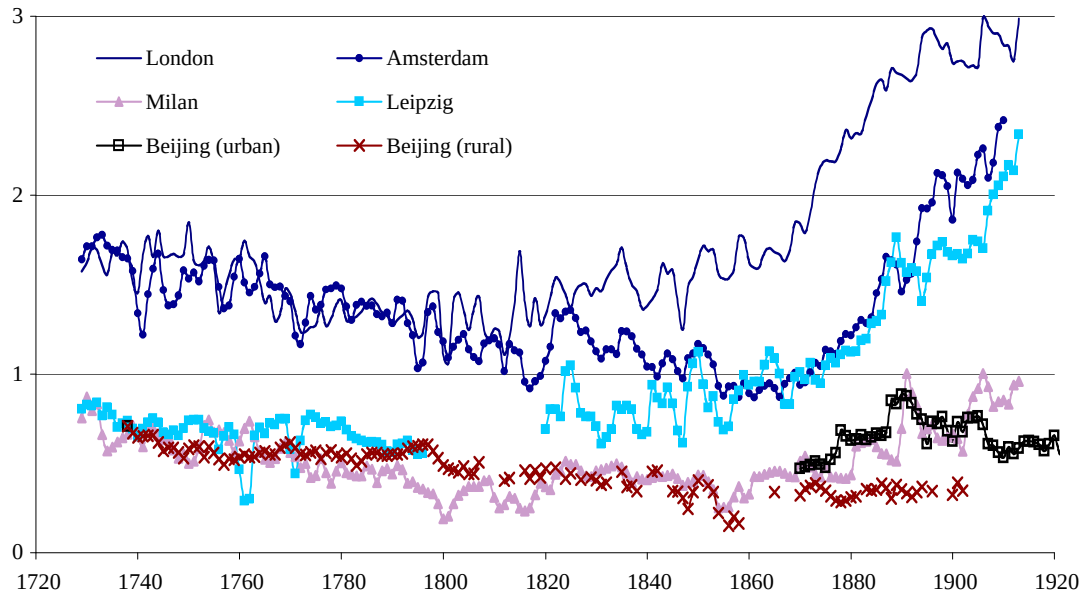
その計算結果をみる前に、バスケットの中身を調べておきましょう。ヨーロッパの場合はパンを 208キログラムと肉類26キログラム、あとは豆類、バター、これしか含まれてない。十分なデータをそろえることができるのはこれしかないので、これでや

Hosei University Repository

ってしまおうということなのですが、ヨーロッパ食文化のエッセンスは確かにありますね。

日本を見る前にちょっとインドをみておきますと、インドはお米を食べますが、同時に肉も食べる。それで、こういう形になります。つまり、パンの代りに米を入れたような形になっています。しかし、これがアジアの代表的な食生活ではない。

第５図　５地域のwelfare ratios



（出所）次の論文より引用：J.-P. Bassino，馬徳斌，斎藤修「実質賃金の歴史的水準比較」『経済研究』第56巻4号（2005年），348-369頁.

日本については２つのタイプが用意されていますが、それは幕末日本の食文化を再現することですら意外と難しいということの反映です。最初にＢタイプをみていただくとわかりますが、魚が入っていません。米も非常に少なくて、その代りに麦類と雑穀が多い。山国に行きますと、昔はこういうパターンでした。お米がとれないところ、魚が届かないところは、ありとあらゆる雑穀類を食べたのです。これはけっこう健康食で、しかも意外と栄養価が高いのですね。安価だけれども、栄養価が高い。ですから、これだけ食べますと、先ほどのカロリーを満たすことになります。

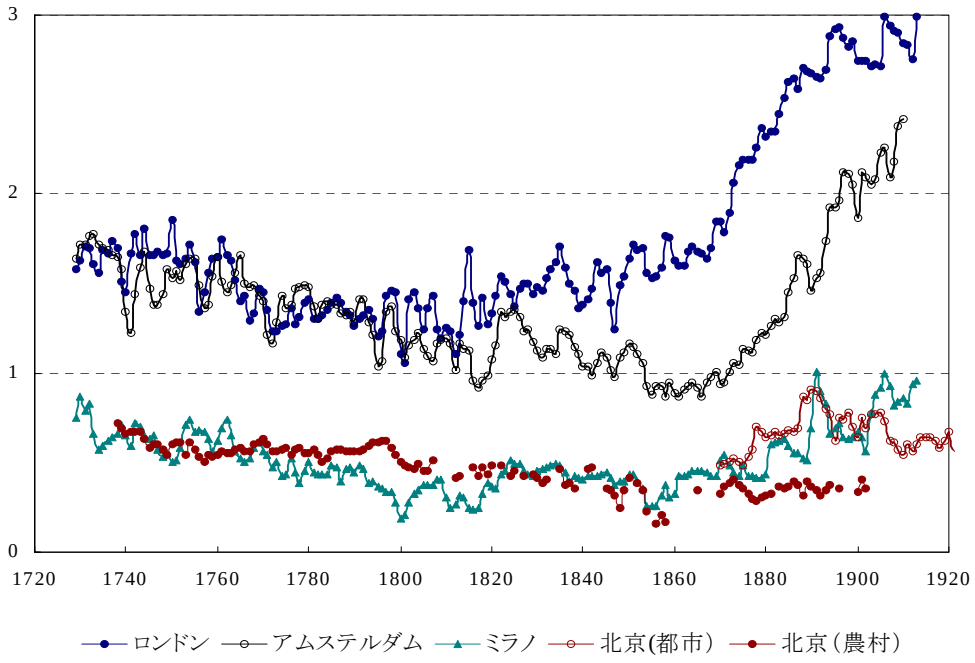
それに対して、いわゆる日本型のバスケットと我々が考えるのがＡタイプです。米を114キロ食べて、魚を3.5キロ食べる。それに大豆製品を52キロ分添える。こういうパターンです。これは私たちに馴染み深い食生活ですが、値段に直しますとＢよりもだいぶ高くなってしまいます。

ここではＡタイプを使って計算しています。つまり、普通、我々が考える日本型の

Hosei University Repository

食生活です。江戸時代における現実の食生活がどちらに近かったか、正確に表すのはなかなか難しい。都市か農村か、また地域によって非常に差があったと思います。しかし、当時の庶民にとっても理想はＡタイプであったと思いますので、Ａを基準にして計算をしてみました。ただ、Ａを使うとＢよりもウェルフェア・レシオが低めに推計されるということは覚えておいていただきたいと思います。

第６図　西欧と中国



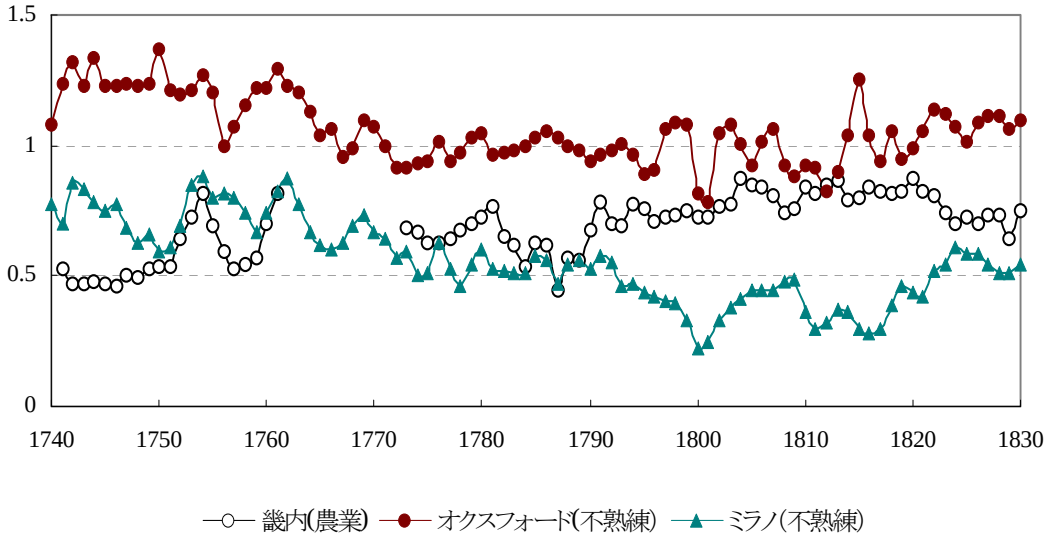
（出所）次の論文より引用：J.-P. Bassino，馬徳斌，斎藤修「実質賃金の歴史的水準比較」『経済研究』第56巻4号（2005年），348-369頁.

こういったバスケットを利用しまして、ユーラシア大陸５地域のウェルフェア・レシオを算出しました。一つのグラフに全部描いてみましたが、それではみにくいので分けてかくことにします。まず西欧、つまり、北西と南のヨーロッパと中国とを比較したものです。

北西ヨーロッパを代表するのはロンドンとアムステルダムです。南欧はミラノ、そして下の方にあるのが中国です。２つありますが、都市と農村に分かれています。これをみてわかるのは、北西ヨーロッパは１より上にきていて、南欧と中国は全く違う地域ですが、似た動きをしていて、しかも、１を下回っているのです。

Hosei University Repository

第７図　西欧と日本：農村部



（出所）次の論文より引用：J.-P. Bassino，馬徳斌，斎藤修「実質賃金の歴史的水準比較」『経済研究』第56巻4号（2005年），348-369頁.

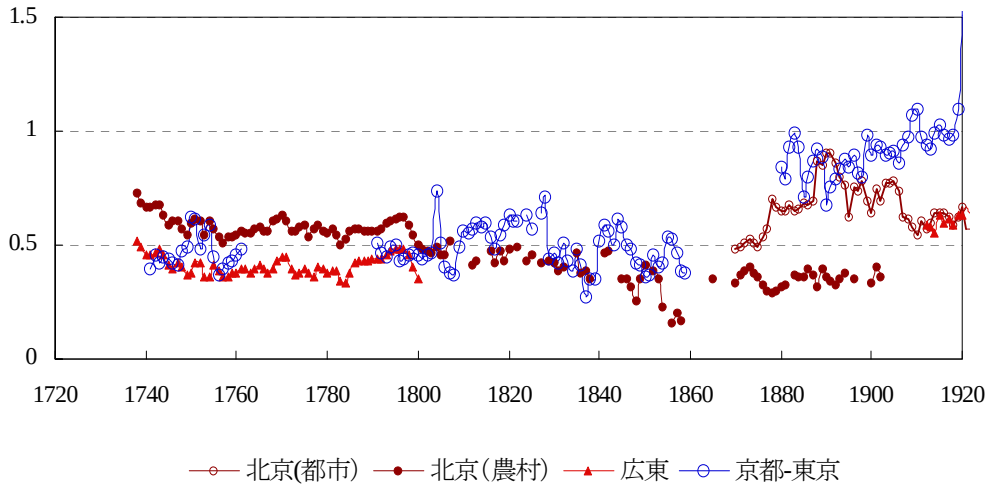
今度は日本をヨーロッパと比較しますが、農村をとっています。残念ながら、とれるデータの関係で、1世紀弱の期間になります。1740年から1830年です。北西ヨーロッパの代表はオクスフォード、つまり、イギリスの農村地帯です。これを日本の畿内農村のデータと比較します。先ほどのように、北西ヨーロッパとそれ以外が截然と区別されるということはありません。両者がもうちょっと近づいた感じです。

これには2つほど理由があります。第1は、イギリスでも都市と農村の間には明瞭な賃金格差があったということ。オクスフォードにおける水準はロンドンよりもだいぶ下にあったのです。第2は、昔でも景気の波があったのですが、ヨーロッパではこの18世紀末から19世紀の初頭が底にあたっていたのに対して、日本の場合は逆に、徳川時代の中でもピークにあたる時代だったのです。そのために、19世紀の最初の20年ころに日本のグラフがオクスフォードのグラフに接近するのです。

こういうことを考慮に入れると、やはりイギリスと日本あるいは南欧との間に水準差はあったとみたほうがよいでしょう。実際、オクスフォードのウェルフェア・レシオはほとんどの年次において１を上回っていたのに対して、畿内とミラノの場合は、すべての年次において１を大きく下回っていました。

Hosei University Repository

第８図　中国と日本



（出所）次の論文より引用：J.-P. Bassino，馬徳斌，斎藤修「実質賃金の歴史的水準比較」『経済研究』第56巻4号（2005年），348-369頁.

最後は中国と日本の比較です。こちらも1740年からの比較ですが、近代までみることが可能です。清朝の間は日本と中国で大きな水準差はありませんでした。どちらも１を下回っていて、明瞭な上昇傾向もなかった。ところが、中国の農村がまず遅れだす。19世紀の後半です。次いで、清朝が滅びる直前あたりから中国の都市系列も日本に遅れをとるようになる。このように、近代に入ってからは明瞭に分岐しますが、それ以前は余り変わらなかったというのが、このグラフからわかることです。

Hosei University Repository

第１１表　観察

（１）　北西欧の都市における welfare ratio は１を上回っていたが、
南欧、中国、日本のそれは全期間を通じて１を下回っていた。
イングランドと低地諸邦都市の実質賃金は近世後期において
すでに突出して高水準だった。

（２）　南欧と中国の水準差はあまり大きくなかった
（中国の農村系列は19世紀後半から遅れをとりはじめる)。

（３）　徳川日本の農業賃金をイングランド農村部と比較すると、
18 世紀の前半にキャッチアップがあり、１８００年前後の一時期
にはオクスフォードのわずか下の水準にまでたっした。

（４）　中国と日本の間にも目立った水準差はなかった。
19世紀後半における中国農村賃金の漸減傾向はあるが、都市間の
比較にかぎれば、日本が中国の水準から離れて上昇を始めたのは
20世紀に入ってからである。

ということで、これらのグラフからわかることは何かというと、第１に、ヨーロッパといっても北西部のヨーロッパは他の地域とは全然違っていて、そこだけがウェルフェア・レシオが１を上回っていた。それ以外はみな１を下回っていたということです。いいかえれば、第2に、アジアの日本であれ中国であれ、あるいは南欧であれ、19世紀後半まではみんな同じような生活水準にあったといえるでしょう。ヨーロッパとアジア、ヨーロッパと日本という比較をしますが、ヨーロッパは一つではない。イタリアやスペインのヨーロッパとだったら、アジアの生活水準は基本的に同一だったのです。

第３に、徳川時代の日本は例外的であったようにみえるときがあった。18世紀末から19世紀初頭にかけて、一時イングランド農村のレベルに非常に近づくことがあった。でも、完全に追いついたわけではなく、それ以降はまた離されてしまいました。第４に、中国と日本の差も近世に関するかぎりありませんでした。ですから、イングランドとベルギー・オランダの賃金水準は、近世でも家族が何とか暮らしてゆける水準よりも高くて、それ以外のところでは大体どこも似たりよったりで、しかもその最低生活水準を下回っていたことになります。

この、大部分の地域でウェルフェア・レシオが１以下であったという観察結果は非常に気になります。これは人びとが非常に貧しかったことを意味していますが、これは絶対的な最低基準を下回っていたことを意味するので、それならどうやって生活を維持していたのだろうかという問題が生ずるからです。つまり、それぞれの国の実際

Hosei University Repository

の賃金率から計算された収入では、１日1,900カロリーを摂ることはできなかった、そういう話だからです。

それが例えば0.8とか0.9とかの値ならわかります。でも、0.5だったり0.6だったり、それほど低い水準なのですね。そのような状態が1世紀も続いたのです。そんなことが可能だったのだろうか、と思わざるをえません。

第１２表　より根本的な問題

■Welfare ratio算出の前提は東アジアの小農民にあてはまるか
■イングランドの労働者家族は賃金収入で生活を支えていた
■しかし、日本の農民の収入は混合所得であった
■さらに、ほとんどの農民が副業収入を得ていた

この疑問をいいかえれば、このウェルフェア・レシオ計算の前提にある話は正しかったのだろうかということです。確かにこの方法は、いろいろある難しい問題をうまく解決してくれる非常にいいやり方だったと思います。けれども、どこか間違ったところがあったのではないかと思うのです。

それはどういうことかといいますと、イングランドのロンドンにおいて労働者はその賃金で１年間働いて家族を養っていました。オクスフォードでも農業労働者はその賃金でもって１年間働いて家族を養っていました。もちろん、いつも年間250日働けたかどうかはわかりません。もしかすると、失業期間がもうちょっと長かったかもしれない。そういう問題はありますが、近代以前であっても基本的にそうやって生活をしていたことは間違いありません。しかし、日本の農民はそうだったのだろうか、データにある賃金率でもって家族を養う収入を得ていた農民がいたのだろうか、ということです。

ちなみに徳川時代は、人口の８割が農家です。８割をしめる農家の人たちのなかにオクスフォードの農業労働者家族みたいな人がいたかどうか、そんな人はほとんどいなかったのです。

彼らはどうやって生活をしたかというと、自分のもっている農地を耕して生活をしていたのです。その農地は小作地だったかもしれません。その場合でも、裏作に何を植え、肥料にどのくらいお金をかけるかといったことは全部自分の判断でやっていました。極端な場合には、儲かるからといって、田をつぶして綿を植えるような農民すらいました。彼らは、自営業の経営者でもあったのです。

そういう農民にとって、賃金率は一体何を意味していたのだろうか。もちろん、徳川時代の農村に行きますと、賃金率はちゃんと存在していました。賃金帳簿もありました。賃金を払う労働、賃金のための労働は現実に存在していました。存在していな

Hosei University Repository

かったのは、その賃金で250日とか300日働いて家族を養うような農業労働者でした。大部分の農民にとって、労働は自分自身も含めた家族労働で、その賃金率は計算すれば賃金帳簿の賃金率と一致したかもしれませんが、その部分が明示的になることはありませんでした。

そのような農民の所得というのは「混合所得」だったのです。つまり、経営者としての所得と、労働者としての所得と、そして自作農であれば地主としての所得が合算されていました。それが彼と彼の家族が育てた作物を売ったときに得られる収入になっていたわけです。その混合所得の額は賃金率の情報だけではわからない。なぜかというと、ほかの収入がどのくらいの割合だったかわかっていないからです。

第１３表　18 世紀日本の自小作農民

	家計所得 (Welfare ratio)		備考
A 農業所得			
自作農（貢租込）	1.32		労働の生産弾力性0.5
自作農（貢租控除後）	0.70		貢租率0.47
小作農（小作料控除後）	0.53		小作料率0.6（田･畑方平均）
B 総合所得	(L)	(H)	
自作農（貢租込）	1.76	2.20	(L) 副業収入は農業所得の⅓
自作農（貢租控除後）	0.93	1.17	(H) 副業収入は農業所得の⅔
小作農（小作料控除後）	0.70	0.88	

（出所）次の論文より引用：J.-P. Bassino, 馬徳斌, 斎藤修「実質賃金の歴史的水準比較」『経済研究』第 56 巻 4 号（2005 年), 348-369 頁.

しかし、それを仮に計算することは不可能ではありません。経済学者のいう生産関数を推計して、生産弾力性を得、それぞれのシェアを求めることはできます。実際、徳川時代の長州藩のデータによってその生産弾力性をはかった人がいまして、そこから得られる労働のシェアは0.5くらいになります。この値を仮定しますと話は単純で、賃金収入の倍の所得があったということになります。18世紀中ごろのウェルフェア･レシオは0.66でした。したがって自作農ならば、実際の農業所得は1.32であったことになるのです。ただし、その自作農も高い税金を納めなければなりません。皆さん、五公五民とか、四公六民という話をお聞きになったと思いますが、それは農業に関して

Hosei University Repository

いえば誇張ではありませんでした。貢租率の推計結果もあって、それによれば0.47、五公五民と四公六民の間です。この率を適用すると、ウェルフェア・レシオは0.7に下がってしまいます。

小作農の場合は、お殿様に税金は払いませんが小作料を払わなければならない。小作料率には0.6という数字がありますので、これを使います。そうすると、0.66よりも低い0.53の水準になってしまいます。

しかし、これは農耕から得られた作物を所得に変えた場合だけの話です。徳川時代の農民は農業だけで暮らしていたわけではありませんでした。「農家」といいますが、農業は主な業で、それ以外にもさまざまな副業、とくに現金収入を求めての副業を行なっていました。ちまちましたものであれば、縄ないやわらじづくりがありました。でも、普通はもう少しましなものをつくっていました。まず、養蚕とか炭焼。いずれもよい稼ぎになりました。それから、機織や糸取り。これは賃仕事に近いですが、それでも腕がよければ相当な収入となりました。

そういう副業収入が一体どのくらいあったのか。残念ながら正確にわかるすべはないのですが、これも先ほどいった長州藩の例から推測はできます。２通りの計算をしてみましたが、副業収入が農業所得の３分の１のケースと３分の２のケースです。現実はちょうど真ん中あたりだったと考えますと、自作農は税金を払っても0.98、ほとんど１になり、小作農だと0.79した。

いいかえれば、自作農ならイギリスやオランダの農業労働者と遜色ない生活水準を維持できたが、小作農だと何かを切り詰めないといけなかったということになります。

ここで先にみた消費バスケットの内容を思い出してほしいのですが、2通りのメニューがありました。ここでの計算は米ー魚型のメニューでやっていましたが、それとは別に、栄養価は同じだけれども安上りの雑穀型がありました。このメニューでウェルフェア・レシオを計算しなおすと、間違いなく１に到達します。そして、それがまた現実だったのではないかというのが、私の考えです。いいかえれば、細かいことは抜きにしまして、徳川時代の人口の８割を占めた農民は何とか暮らしてゆけた、つまり、生活水準を実質賃金の水準、賃金収入の水準の問題としてではなくて、本当に生活をするための所得の水準と考えますと、徳川時代の農民の生活水準は多分イギリスの普通の労働者の生活と余り変わらなかった、というのが私の結論です。

Hosei University Repository

第１４表　生活水準の大分岐？

■日本農村の生活水準はイングランド農村部とそれほど変わらなかった。その意味で、18 世紀にはいまだ「大分岐」（the Great Divergence）は生じていなかったというポメランツの主張には一理がある。

■しかし、それは北西欧とはまったく異なった途をたどったことの歴史的帰結であった。その意味では、構造的な「分岐」の結果でもあったともいえる。

ここで最初に紹介したポメランツさんの問題提起にもどっていうと、19世紀以前では東西間の「大分岐」は起こっていなかったという彼の考えは正しかったということです。

私たちがみたのは日本だけでしたが、中国に行きましても、事情は同じではなかったかと思います。もっとも中国は広大な国ですので、一括りにして論ずることはできないでしょう。揚子江下流域とか広東のように農業的に豊かな地域を取上げてみれば、やはりイギリスやオランダと変わらないということではなかったかと思います。

ただし、そのような同一性の背後には、これはポメランツ先生のいっていないことですけれども、非常に大きな違いがあったということも強調しておきたいと思います。つまり、イギリスやオランダに行きますと、産業革命が始まる前、あるいは近代資本主義が成立する前から、労働者は労働市場に出かけていって自分で職を探し、働かないと生活できず、家族を養うことができない、こういう社会でした。農村に行っても、日本や中国のような家族農業を営む農家は存在せず、農場主と農業労働者ばかりでした。そういう農業労働者は農場で１年間に250日とか300日働いて、それで生計を維持していたのです。そうすればウェルフェア・レシオは１を上回った、それだけで生活維持ができた。これは、ある意味では労働の生産性が高い経済ということができます。高い労働生産性と労働市場の存在がセットになった経済が、近代以前からあったのです。

それに対して、徳川時代の日本は全く逆で、そういう意味での労働市場はほとんど存在しない。つまり、農村では労働市場に依存しないと生活できない農家は存在していなかったのです。農村にも、豊かな農家は人手を雇い入れていて賃金帳簿があったといいましたが、そういう人は１年間にならしてみますと、ほんの10日とか20日とか、わずかの期間しか働いていないのです。地主家の田植えの手伝い、除草の手伝い、刈入れの手伝い、それだけです。もちろん、もっと貧しい農家なら娘を奉公に出すということもあったでしょう。でも、そういうタイプの雇用労働しかなかったのです。そして、彼らの賃金は安い。それだけでは、たとえ250日働いても一家を養うことはできない。けれども、農家は経営者としての取り分を所得とすることができましたし、ま

Hosei University Repository

た農閑期にはさまざまな副業をして収入を補うこともできました。

いいかえれば、自営業の世界だったのです。現在でいいますと、町工場や個人商店が典型ですが、2世紀前は一国全体が自営業の経済だったと考えるとわかりやすいかもしれません。このような経済の労働生産性は低いかもしれない。けけども、土地生産性は高いので、農民は、少なくとも自作農は、あれだけ小さな土地で十分生活していけるということであったと思います。

こう考えますと、近代以前の時代では、むしろイギリスとかオランダ型の方が変わっていたのかもしれません。ヨーロッパであっても、もっとずっと前であれば、タイプとして日本のような経済であったのかもしれませんが、きっと歴史のどこかの時点で「分岐」が起こって、私たちが知るような経済となったのでしょう。

その結果、今日お話をしたような東西の水準比較となった。すなわち、生活水準ではあまり大きな違いはなかったが、その背後にある経済構造は非常に異なっていた。それが私の結論であります。そういう観点からみれば、恐らくアダム・スミスも、岩倉使節団の一向も、ハンレーさんも鬼頭さんも、そしてポメランツさんも、ある意味で正しい観察をしていたのだけれども、全体の構図は完全には捉えきれていなかったのではないか。

これが、先学に対する私のコメントにもなるかと思っております（拍手）。

６．質疑応答

○司会者　　どうもありがとうございました。先生、どうぞおかけになってください。

非常に痛快なおもしろさでお話を伺うことができました。幾つか感じたこと、感想を先に述べさせていただきます。

まず、非常にエリートの所業なんですね。100年、1000年というロングタームで実質賃金がどう動いているか。それは一体何のためと尋ねたい方も会場にいらっしゃるかもしれませんが、それは、例えば天文学者が新しい惑星をみつけたということと同じですね。新しい惑星を一体何のために見つけたのか、と尋ねることに近いところがあって、その答えは知的好奇心というか、我々にとっての教養だと、そういう理解の仕方が１つあるだろうと思います。つまり、これで家に帰りますと、夜のニュースなどをやっていて、昨年に比べてＧＤＰが１％上昇しましたと言っているかもしれません。１年前と今年を比べることに意味があるのならば、１年前と２年前を比較し、２年前と３年前を比較し、それに意味があるのだとすれば、さらにさかのぼって1000年前から比較できることになる。その比較をしてから、はじめて構造変動があったのか、なかったのかがわかる。そういう知的なおもしろさという意味での教養だろとう思います。

もう１つは、イギリス経済史の伝統だろうと思いますけれども、イデオロギー的なある種の闘争といいましょうか、それがあると思います。先ほどお話がありましたけ

Hosei University Repository

れども、農民層分解というのは、いわゆるマルクス主義の中の『資本論』というマルクスの書いた本の中での１つの概念ですけれども、マルクスはその中でいろいろおもしろいことをいっています。単純に言えば、資本主義のもとでは窮乏化法則があり、資本主義になると労働者は貧しくなるんだと言っています。

だから、社会主義を興さなきゃいかんというのがマルクスの書いた『資本論』の中のロジックだと思うのですけれども、いや、資本主義になったから貧しくなったのではなくて、ルネッサンスのころから一貫してずっと貧しくなり続けていたのだから、ここ七、八百年ずっと貧しくなり続けたあとで、産業革命でむしろ豊かになったんだという図が斎藤先生の報告の中で出てきたということではないかと思います。

ですから、既に資本主義対社会主義という座標軸は意外と忘れられがちですけれども、まだすぐそばには北朝鮮とか、中国も共産党の一党独裁がまだ進んでいるわけでありまして、そういう国々の思想的なバックボーンに立ち返ると、経済史でどのように我々がその歴史を認識するかというのが非常に大きな課題なのかもしれません。それが２つ目の理解の方法で、おもしろければいいという人と、いや、資本主義対社会主義の思想的な対立が重要だという方とが、いらっしゃると思います。

第三に、最近の日本の議論に引き寄せて理解する方法があると思います。それは、格差社会が広がっているという話との比較になります。21世紀の日本で格差が広がっているという話がありますけれども、要するに、江戸時代に農民の子として生まれたら、ずいぶんと大きな格差を感じたに違いありません。小作農に生まれるか自作農に生まれるかで、実質所得で 2.6倍、0.5対1.32みたいなものをみますと、長期的にみれば多少はやはりよくなっているのかなという気がちょっといたしました。もちろん、こうした理解をすること自体イデオロギー的な側面がないとは言えません。

それで、斉藤先生、恐縮ですけれども、中国と日本の第８図をちょっと戻していただけますでしょうか。――我々が今回問題にしております明治初年というあたりで、1880年、法政大学ができたあたりをみますと、これは見事にオクスフォードに追いついている。このデータをみますと、京都、東京がほぼ１に近づいている時期というように理解してよろしいんでしょうか。

ですから、法政大学が成り立つというのは、地方からお金をたくさんもって東京に遊学にきた学生が増えた時期なのかもしれません。今は海外、たとえばサンフランシスコやロンドンに留学するのと同じように、高知や長州、三重県、そういうところから東京にお金持ちの農村の子弟が遊学、留学にやってきた、それが可能になった豊かさが多分あったのかもしれないということがわかるように思います。

江戸時代の末期、1860年のところからジャンプして、1880年に水準がよくなっているわけですけれども、これはおそらく明治の中央集権化の効果であって、日本じゅうの豊かな農民が東京に集まってくる、そういうことが容易になったその効果、つまり、自由な労働移動にもとづく都市化の効果かなと解釈してみておりました。

Hosei University Repository

本シリーズの第１回目のときに、1880年代が政治的にみて自由民権運動の時代であったというお話をしたかと思います。そして、その自由民権運動を支えていた大きな力というのが地方の豪農と呼ばれる人たちで、その豪農の人たちを集めた知識、あるいは政治的なプロパガンダというものが各地域ごとに広がっていって、国会の開設運動につながっていく。ですから、そういう豊かな層の子弟が法政大学に勉強しに来ていたんだろうと思われます。

法政大学の年史をみますと――会社でいえば社史ですけれども――アッペールというフランス人の教頭がいたことがわかります。彼はボアソナードさんの下で一緒に働いていた方ですけれども、結構辛らつで、「法政大学で学生を教えるのは非常に楽しかった。彼らは基本的には帝国大学に入れずに、そして、地方国立大学にも入れない子供たちであり、私立大学の法政大学にやってきて、でも、その子たちを育てると非常によく育って楽しかった」という言い方をしています。

多分そんなメカニズムが働いていて、この時期、つまり、オクスフォードと同じ水準に東京という都市の生活が変化して、その都市生活の水準の上昇が第３次産業である大学の隆盛を招いたように思います。法政大学だけではなく、早稲田も明治も慶應も皆でき上がっていく時期だと思います。

まだ残された時間がございますので、皆さんからのご質問をぜひお受けいたしたいと思います。どうぞ、どのような点でも結構です。――お願いいたします。

○質問Ａ　　斎藤先生、どうもお話大変ありがとうございました。大変高度な専門的なお話を、しかもわかりやすく正確にお話しいただいて、こんな立派な講演はなかなかないのではないかと私は思っております。

私の質問で、第１は、なるほどカロリーで計算するのは大変うまいものだと思いましたけれども、一様に高いか低いか、これはアンガス・マディソンと同じように極めてわかりやすい基準ですけれども、体位ということがありましたね。体位・体格ということがそのウェルフェアの中に入っていると考えれば、体格がいい方がいいんだけれども、オリンピック等々からみまして、日本人の体位を考えますと、カロリーを向こうと同じようにとる必要はないのではないか、と思います。

というのは、ロシア、ポーランドの連中とよく話したんですけれども、「おれらは砂糖をたくさん消費しているのに、おまえらは消費が低いじゃないか」と。砂糖を食ってがぶがぶ太ったって意味がないんじゃないか。ちょっと脱線ですけれども、体位とカロリーはかなり厳密な相関があって、国際比較では１つ問題が出る。

あと、ぜひ先生に伺いたかったのは、実は徳川時代がリサイクルとして非常にすぐれた社会だったという点です。徳川の非常にいい点だということがあって、最近、ダイアモンドという人が『文明の崩壊』というのを書きまして、なかなかおもしろい本ですが、イースター島などの文明をめっぽう書きまして、木材が壊れてなくなったと。

Hosei University Repository

それなのに徳川は非常に成功したんだというんだけれども、その森林政策が徳川時代にうまくいったということをちょっと調べてみたら、なかなかよくわからなくて、もし先生がご存じなら伺いたいと思いました。

○斎藤　　ありがとうございます。

体格の話は私も興味をもっていて、少し調べております。先ほど申しましたが、今日お話したような計算だけで生活水準がわかるとは思っておりませんので、徴兵検査の記録などを集めております。これらをみると、非常に違う側面がわかってきます。

先ほどいいませんでしたが、ハンレー＝鬼頭さんのような評価ですと、徳川の日本は何かとてもよくみえます。経済状況はそれほどひどくないし、公衆衛生もまあまあしっかりしているし、道を歩いていて2階の窓からごみを投げられることもないですし、リサイクルもやっていた。けれども、もし体格面から生活の質をみてみると、ずいぶん違った比較となってしまいます。

身長は過去の栄養状態の累積的な効果を反映している、その意味で生活の質をよく表しているという議論があるのです。

これは有名な話ですが、夏目漱石が留学したとき、1901年ヴィクトリア女王が崩御して葬儀のプロセッションがロンドンであった。彼は下宿の主人と見物にいったのだけれども、背が低くて見えない。夏目漱石は160センチに達しなかったのですね。当時の日本人としては平均なのですが、見えないので下宿の主に肩車をしてもらったのです。これほど当時の日本人は背が低かったわけですが、もっと大きな問題は、多分、徳川時代から改善がみられなかったことのほうだと思います。

私たちは普通、体格はカロリーをどのくらい摂るかで決まると考えます。子供が大人になるまでにどのくらい成長するかにとって、確かにカロリー摂取量がまず重要なのですが、医学者がいうには、摂ったカロリーから引かれるものがまた重要だというのですね。最初に来るのが、心臓とか筋肉を動かすために使うエネルギーで、これは体の大きさによって決まります。

ところが、あと２つ重要なポイントがありまして、１つが労働です。これも結構大きい。農民のように労働がきつい職業だと、同じ1,900キロカロリーとっていたのでは成長に回らない。それも子供自身の労働よりは、母親の労働が子供の成長に影響するということなのです。とりわけ子供がおなかにいるときのお母さんの労働は一番いけないのです。ところが、日本の農家の女性は出産直前まで働くのが普通でした。これだと、子供はなかなか大きくならない。

しかしそれは、先ほどいいました日本の経済のあり方といいましょうか、生計の立て方と直結していました。家族を挙げて狭い土地を耕し、土地から産出される作物を最大にするよう努力していたわけです。ですから、母親の労働というのはすごく大事だったのですが、その目にみえない犠牲が子供の体格へ出ていたと考えることができます。

Hosei University Repository

３番目は、これも目にみえない細菌です。どのくらい病原体と接したるかということが重要です。これは怖ろしいコレラとかペストである必要は全然ない。風邪の病原体を始めとして、普通の病気であっても、それに接することで身体は非常なエネルギーを消費する。本来だったら成長に回るはずの栄養がそこで消費されきってしまう、ということが起こりえたのです。明治になると、外国との交流が始まり、また文明開化の波に乗って、ヒトとモノだけではなく、病原体も農村部までどんどん入ってゆきました。日本という国は地理的に狭い平野とか盆地が分立しているようなところでしたが、それが明治になりますと、鉄道が敷かれ、人間や物資の移動が激しくなる。それらと一緒に病原体も移動するということになりました。

たとえば養蚕地帯を考えましょう。昔は蚕は１年に１回、春蚕をとっておしまいでした。ところが、技術が進んでくると、夏蚕、さらには秋蚕をとるようになる。つまり、２回、３回と孵化させることができるようになったのですね。そうなりますと、それだけで村にやってくる商人の述べ人数が３倍増になるわけです。ヒトとモノの動きがそれだけ激しくなり、それに伴って病原体も一緒に動いたのです。その病原体がコレラ菌だったらたいへんですが、普通の風邪のウィルスだったら、親は鼻風邪で済むでしょう。けれども、子供は病気になってしまう。死なないかもしれないけれども、それのときに身体の中ですごくカロリーを消費してしまうのです。しょっちゅうそういうことが繰り返されると、明らかに発育に悪影響を及ぼしました。

徴兵検査の記録をみますと、明治の初めのころ東北というのは比較的背の高いところでした。一番高い地域ではなかったのですけれども、平均よりは高い、明らかに東京よりは高いところでした。ところが、それから何十年かたつと、東北は全国でも背の一番低いところになってしまったのです。これも、以前はヒトとモノの中心ルートから外れていて、それだけ病原体との接触が少なかったところが、文明開化の世となり、東北線が敷かれ、養蚕地帯が興り、隔離されていたところに外の影響がどっと入ってきた結果と解釈されています。

鉄道の敷設も、養蚕業の興隆も、そしてそれを支えた農家女性の労働も、いずれも人びとの所得を高めます。生産－所得という面からみた生活水準を上げます。しかし、その同じことが彼らの子供の成長にブレーキをかけていたのです。これは、明治の経済成長のために払った代価とみることができるかもしれません。

ですから、体位というのは非常に複雑な指標で、カロリー摂取量だけで決まるわけでも、民族の遺伝子で決まっているわけでもなくて、時間の変化、社会のあり方の大きな変化というものがそこに絡んでいたということがわかります。

２番目の森林の話、これも私が興味をもっているテーマで、この点に関しては日本のパフォーマンスのよさが目立ちます。こちらも比較可能な数字、森林被覆率という数字を集めているのですけれども、イギリスの賃金データと同じくらいのタイムスパンでみています。今のところイギリスとフランス、アジアはぐっと短くなりまして、

Hosei University Repository

中国と日本のデータをもっています。これをみると、確かに日本は森があまり荒れなかった珍しい国だったことになります。

ジャレド･ダイアモンドが引用している本は、アメリカの日本史家コンラッド・タットマンの『グリーン・アーキペラゴ（緑の列島)』なのですが、『日本人はどのように森をつくってきたのか』というタイトルで翻訳がでています。この方がいっているのはこういうことです。普通どのようなところでも、森を伐採しつくしてしまえば、すぐ代替物にゆく。建築用材であれば石やレンガを用い、他の用材としては鉄を導入し、燃料としては石炭を使い始める。ヨーロッパの歴史はまさにそのように推移したけれども、日本はそうならなかった。それは、森を再生する、植林する林業へ転換したことで森林を守ったのだ、と。

全体として正しいと思いますが、それを為政者の制度設計とか、日本人の森への思い入れとかで説明するのはミスリーディングだと思います。つまり、日本でも森が大いに伐採された時代はあった。例えば17世紀の人が書いたものを読むと、山が大変荒れているということがでてきます。そのなかでも熊沢蕃山は、このことをテーマにして書いているような感じがあるくらい、熱心に論じています。そして山を守るためには木を植える方策を考えるべきだといって、今日の環境論者の先駆けとみなすことができるような議論をしているのです。

また、山が荒れると水が出ます。水が出ますと、村と村の争論とか、隣同士の領地間の争論とかが起こります。実際、当時、山論・水論がたくさん発生したことがわかっていますですから、17世紀に森林被覆率が低下したということは間違いないと思います。

それに対する最初の対応は、お殿様の「留山」でした。「ここは藩有林であるから入るな」という禁令です。しかし、制度的にみますと、もっと重要な発展は「年季山」とか「部分山（ぶわけやま)」という仕組でした。これは、藩と山林資本家との間での契約で、年季を限ったり、収益のシェアを決めたりて、そのかわり管理は山林資本家にまかせるというものです。これによって、営利のために植林をするということが普及した。用材がマーケットで売れるので、スギやヒノキを植林するという産業が成立したのです。これは藩政府の主導で行なわれたというより、農民側のイニシアティヴだったように思います。当時、農書という農民向けのマニュアルみたいな出版物が少なからず出版されました。その山林の章をみると、大抵、木を植えなさいと書いてあります。手間隙かけて植林しても、相応の値段で売れますよと、植林を勧めているものが多いのです。

ただ、その場合、もとの伐採した木を植えるのではないのですね。伐採したのはブナとか他の広葉樹だったことが多いのですが、植えるのは大抵スギとヒノキの針葉樹です。つまり、市場で売れる用材を植林したのです。ですから、現在スギの美林といわれているところはほとんど全部植林です。現在、花粉症で困っているのはまさにそ

Hosei University Repository

のせいなのでしょう。

その結果、日本の植生マップがずいぶん変わってしまったようです。生態学者の書いたマップをみてびっくりしたのですが、現在のマップは本来あるべき植生と相当に違うのだそうです。

それから、日本の場合、なぜ売れるものの植林という事業が成功したかといいますと、たぶん鎖国をしていたからでしょう。安い材木が輸入されなかったからです。例えばイギリスをみてみますと、イギリスでは非常に多くの樹木が失われたのですが、代わりにスカンジナビアからの輸入が始まります。その方が植林するよりも安かったからです。イギリスでも思想面では産業革命の前から森林保全の動きが出てきます。ですけれども、現実には入ってくる木材の方がずっと安い。これは、今、我々が戦後の日本で経験していることですが、そういうことが鎖国下では起こらなかったということは、市場が植林を促すというメカニズムが働くために大きかったと思います。

もちろん、思想とか制度、政策は非常に重要で、それは開国をした後も植林をする林業がすたれなかった要因の一つとなっていました。ヨーロッパは一般に森林の伐採が激しくすすんだのですが、他方ではそれを回復させるための技術とその学問が最初に成立したところでもありました。岩倉使節団が行ったころにはもう立派な林学があって、使節団はそれもしっかりと学んできました。それもドイツです。ヨーロッパの中で最初に植林の技術が学問として成立したのはドイツでした。そういうこともあって、農商務省、あるいは後の農林省の山林局は留学させるときは、全員ドイツでした。彼らはみな、森の保全という哲学も一緒に持ち帰ってきました。森林保護のイデオロギーと造林のテクニックを学んで、帰ってきたのです。

明治になると、再び山が荒れる時代となっていました。それに対して彼らは、最初は国家を前面に出てやろうとするのですが、いろいろ問題が起こります。どこが荒れるかというと、村の林が荒れる。村の里山というのは入会地ですので、村の人に権利があるわけです。村の人が、例えばうちも製糸を始めたから薪が必要だといって、入会地にいって伐ってくる。実際、諏訪のような製糸業の中心地となるところではそれが起こって、村の入会山があっという間にはげ山になりました。これは典型的な「コモンズの悲劇」です。経済学者のいうフリーライダーの問題です。

もう一つは恩賜林です。恩賜林だと、県有林などと違って監視の目がゆるやかなので、農民が入りやすくどんどん伐採してしまう、そういうことが起こりました。そういうことが続くうちに、明治末年から対象のころのことですが、山林局に自生的制度の見直し機運が起こり、徳川時代に出来上がった「部分山」のような制度の活用によって植林を促すという行き方が再び登場するのです。

こうみてきますと、日本の環境史は成功例だといっても、それはいろいろなことが組み合わさってそうなったと考えるほうが正しい。日本人の森への態度とか、為政者の制度設計思想ということだけで説明できるわけでなく、鎖国をしたタイミング、開

Hosei University Repository

国をしたタイミング、その時々の経済の構造、外国から学んだ林学の性格、そういういろいろなことが絡んだ結果ではないかと私は思っています。

○司会者　　どうもありがとうございました。

ヨーロッパと日本のいろいろな情景が思い浮かんでくるようなすばらしい講演だったと思います。もう一度、皆様、斎藤先生に拍手をお願いいたします（拍手）。

どうもありがとうございました。

日　時：2006 年 4 月 7 日（金）　19:00～20:30

会　場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード･タワー25F
イノベーション･マネジメント研究センター セミナー室

司　会：洞口治夫（法政大学大学院
イノベーション･マネジメント研究科教授）

Hosei University Repository

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター
The Research Institute for Innovation Management, HOSEI UNIVERSITY

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1
TEL: 03(3264)9420　FAX: 03(3264)4690
URL: http://www.hosei.ac.jp/fujimi/riim/
E-mail: cbir@adm.hosei.ac.jp

禁無断転載